

佐伯市の水産事業者との連携による新ビジネスモデル模索プロジェクト

～ 学生目線による佐伯市水産業の魅力発掘・創出の実践 ～

指導教員：日本文理大学 経営経済学部 山内勝義、小久保雄介、阿部裕香里、梶田真生

1. プロジェクトの概要

大分県佐伯市の水産業における働き方や経営上の課題を学生が認識し、課題解決を水産事業者(漁業者および加工業者等。以下同様)と共に模索することを目的とし、課題を抱える対象者は、大分県佐伯市の水産事業者と規定した。

本プロジェクトが対象とする大分県佐伯市は農林水産業が盛んであり、特に水産業の生産量は県内の水産業生産量の65%、養殖業は全県生産量の約80%を占め、多種多様な魚介類や水産加工品を売り出しているにもかかわらず、佐伯市の水産業の認知度はそれほど高くない。その上、佐伯市の漁業就業者は平成5年から平成25年にかけての20年で46%も減少し、年齢別漁業就業者は40歳未満が全体の20%と漁業後継者不足の恐れが顕著に表れていると推察され、早期に佐伯市の水産業を担う人材の育成をしなければ大分県の水産業生産量は大きく減少する可能性が高い。

本プロジェクトでは、学生たちに大分県の水産業に興味をもってもらうために、水産業者の話を丁寧に聴き取り、水産事業者の方々があたりまえのこととして気付いていない仕事・産物の魅力を、学生たちの目線で発掘し、その魅力を多くの人や地域へ発信し、認知度を向上させるためには何が必要かを深く考え、解決策を水産事業者の方々と一緒に模索した。

2. プロジェクトメンバー

指導者：日本文理大学 経営経済学部 教員4名
参加学生：日本文理大学 3年生3名、2年生11名
連携企業・自治体等：佐伯市役所 農林水産部、大分県漁業協同組合、道の駅かまえ、後藤緋扇貝、早川商店、親幸水産、山崎水産、村松水産、浪井マルミ水産、浪井丸天水産、おおいた食育ひろげ隊、さいき・あまべ食べる通信、

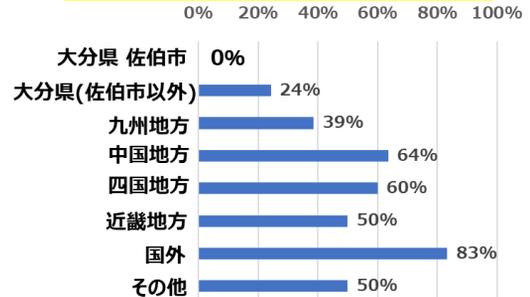
地域での交流と学びの状況



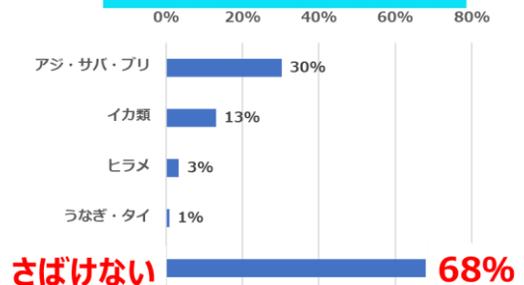
3. 学生による課題解決行動と地域への成果等

- 日本文理大学生に対して行った「大分県佐伯市の水産業についてのアンケート」の122件の調査結果を分析し「遠方に行くにつれて知名度が下がる」「そもそも佐伯の魅力が伝わっていない」「誰が生産した魚なのか気にしない」「天然と養殖魚の違いを気にしない」「魚を捌けない」という課題を見出した。

知っている佐伯のブランド魚
(知っているものは無いと答えた割合)



自分が捌くことができる魚



【学生たちが考えた現時点での課題解決策】

- ① 魚をさばくことができない人に対して、動画を発信し、魚をさばくことへの興味を促す
- ② 商品開発 = 鰯の薫焼き
- ③ SNSや解体ショー等の認知度・消費量向上のための活動
- ④ 調理実習やスーパーの試食などで味と存在を知ってもらう
- ⑤ レシピ(加工品)を作る 例：ヒラメの干物
- ⑥ リモネンが多いなど美容や健康志向の方にアピールする
- ⑦ 味だけにこだわらない
- ⑧ インフルエンサーとの連携
- ⑨ ASC認証の獲得
- ⑩ 「ゆるキャラ」を募集して知名度向上
- ⑪ 単に「ゆるキャラ」を募集するのではなく、「ゆるキャラ」募集をフックに佐伯の水産物の良さを知らしめる「オリエンシート(募集要項)」を作成し、関連イベントを開催することによって環境や水産業などの佐伯の魅力を伝え関心を高める
- ⑫ 「ゆるキャラ」を通して子供に佐伯の魅力を知ってもらうことによって、親の認知度が上がることも狙う

- 11/20に、お世話になった地域の方々に対して、活動の中間発表会を佐伯市のさいき城山桜ホールにて開催し、その模様は、大分合同新聞に記事掲載された。また、自分達も魚を捌けるようになりたいと「おおいた食育ひろげ隊」のご協力を得て、アジの捌き方を実地で学んだ。